

◇ 特集 ABTEC を振り返る ◇

ABTEC2012 開催時の思い出と砥粒加工学会への思い
Memories of ABTEC2012 and JSAT青山栄一*
Eiichi AOYAMA

Key words: ABTEC2012, Doshisha University, Kyoto, young generation

1. ABTEC2012 開催時の思い出

2012年8月29日から3日間、砥粒加工学会学術講演会を同志社大学京田辺キャンパスで開催させて頂きました。あれから5年が経ち、記憶も不確かになってきていますので、記憶違いなどがあるかも知れませんが、その部分は「あいづらしいな」と言うことでお許し頂きたいと思えます。

同志社で開催するにあたり、京都市内で交通の便の良い今出川キャンパスでの開催を望まれる声も多かったのですが、研究室のある京田辺キャンパスの方が学生や大学事務からの支援を受け易いこともあり、会場準備や運営のことを考え京田辺での開催とさせて頂きました。そのため、皆さんにはご不便をお掛けすることになりましたが、多くの方に参加して頂き有難うございました。5年前のことですが、この機会を頂いて改めてご参加いただきましたお礼とご不便をお掛けしましたことへのお詫びを申し上げます。

ABTECの実行委員長を拝命した時、皆さんから「大変ですね！頑張ってくださいね。」とのお悔やみの言葉をよく掛けて頂きましたが、私は、それほど心配はしていませんでした。関西独特の風土でしょうか、他学会も含め支部の結束が強く、とりわけ砥粒加工学会の関西地区部会(旧関西支部)は北嶋先生を中心に和気あいあいとした雰囲気の中で交流を深めていましたので、実際の準備や運営は関西地区部会として実行委員の方々が率先して動いて頂けることがわかっていたからです。実際、実行委員長としての私の仕事は会場準備のための教務や施設との交渉と特別講演の講師依頼ぐらいでした。実行委員の方々のご活躍のお陰で ABTEC2012 を無事に終えることができましたが、苦勞が少なかつたぶん思い出も少なく、この記事を書くのに苦勞しています。ただ、大きなしくじりと大慌ての経験だけは、今となっては「懐かしい思い出」として残っています。

特別講演の講師をお願いすることが私の大きな仕事でしたが、前年度開催の中部大学の流れで、同じテレビ番組に良く出演されていた村田晃嗣先生にお願いできないだろうかということになり、私とその交渉にあたることになりました。しかし、同じ大学でも村田先生は今出川、私は京田辺に本拠地があ

り、皆さんと同じく村田先生をテレビで知っているだけで全く面識はありませんでした。また、テレビ出演で知名度も全国レベルになっておられたので、大学の宣伝のために頻繁に講演に駆り出されておられました。そのため、全く面識のない私がピンポイントに日時を指定して講演を依頼しても、わざわざ日程調整までして講演を引き受けて頂けるか自信がありませんでした。そこで、頻繁に今出川に行かれていた当時の副学長に村田先生の人柄や状況をお聞きすることにしました。その結果、村田先生は学部長になられてから学内の行事が増えたため、テレビ出演や外部の講演は控えて学内におられることが多いこと、人前で話すのが好きなので日時さえええれば講演は引き受けて頂けるだろうということがわかりました。希望が見えてきましたので、さっそく村田先生に講演の依頼をしましたところ、すぐに承諾のお返事を頂くことができました。



図1 村田晃嗣先生の挨拶

これで、大役の1つを果たせたと安堵していたのですが、当日に講師が日時を間違えて特別講演が中止となる前代未聞のハプニングに見舞われました。この時には、会長の大下さんが機転を利かせて、懇親会までの空いた時間を埋めて頂くなど大変ご迷惑をお掛けしてしまいました。ただ、懇親会までに村田先生と連絡が取れ、懇親会に参加して皆さんにお詫びの挨拶をして頂いたのは不幸中の幸いでした(図1)。このしくじりの原因は、村田先生への講演の確認を一週間前に行ってはいたのですが前日にも行っていなかったため、村田

* 同志社大学: 〒610-0321 京都府京田辺市多々羅都谷1-3
(学会受付日: 2017年 9月28日)

先生の勘違いを訂正できなかったことにあります。大事な事柄については、繰り返し確認を行う必要性を肝に銘じた出来事でした。

特別講演の講師不在という混乱の中、途中で抜けさせて頂き、もう1つの大役である懇親会進行の準備のために会場に向かいました。会場に到着して、懇親会の目玉である京舞の芸妓さんに挨拶するために控室に行きますと、控室は戦場の有様でした。事情をお聴きすると、当日は芸妓さんのお呼びが多くて出払っているため、別の花街からも助っ人に来て頂いており、このようなことは花街により舞の流派が違うので例が無いそうです。北嶋先生のお力で実現した舞台です。そのため、演目などの打ち合わせや合同の稽古は事前にできず、控室で打合せと稽古を本番までの短い時間に大慌てで行っている最中とのことでした。芸妓さんの紹介を間違えると大変なことになるとのことで、紹介の仕方を教えて頂きながらメモしていたのですが、芸妓さん同士の打ち合わせで変更が出るたびにメモの修正が必要になり、最終的に紹介のためのメモが出来上がったのは開演時間の直前になってしまいました。出来上がったメモは斜線だらけで解読不能状態になっていましたが時間が無いので解読は後回しにして会場へ急ぎました。会場に入ると皆さん到着されて開演を待たれており、開催校の挨拶を頼んでいた八田学長の顔も見えましたが挨拶する暇もなく、ホテルの宴会係の人と段取りを相談しながらのバタバタの開演となりました(図2)。会場での打合せや段取りの確認もできないまま式次第と解読不能のメモだけを頼りに懇親会の進行を進めていましたので、戸惑いと緊張の連続で開演してからのことはほとんど覚えていません。記憶が戻るのは懇親会がお開きとなり、学生たちと飲みに行ったところからです。



図2 懇親会

2. 砥粒加工学会への思い

私が砥粒加工学会に入会したのは、北嶋先生からお誘いがあったからです。私は加工に関しては切削加工を中心に研究をしていましたので、北嶋先生は精密工学会を通じて存じ上げてはいましたが、研削も研磨も扱ったことが無く、砥粒加工学会には全く興味がありませんでしたので少し迷いました。

しかし、入会してみますと当時は支部活動への参加が中心でしたが、北嶋先生を中心に非常に和気あいあいと活動されており、その雰囲気魅せられて今日まで会員を続けてきました。私に学会活動の楽しさを教えて頂いたのは、砥粒加工学会の関西地区部会だと思っています。

また、インドでの交流会でお知り合いになった安永先生が専門委員会を立ち上げるとの案内を見て、久しぶりにお顔拝見と軽い気持ちで入会させて頂いたのが次世代固定砥粒加工プロセス専門委員会です。こちらは東京での開催ですので余り出席はできていないのですが、研究会の企画が非常に良く練られており、講師の方も先端で活躍されている方を呼んでこられるので、講演の内容も理解しやすく、講演会のあとの交流会で講師の方と直接飲みながらお話しできるので、研究の裏話など知ることもでき非常に勉強になります。砥粒加工に関しては全くの素人でしたが、砥粒加工の知識や研究のアプローチの仕方など研究の楽しさを教えて頂いたのはこの専門委員会だと思っています。

できが悪いので大きな活躍はできませんでしたが、来年無事に定年の年を迎えることができますのは、砥粒加工学会を通じてさまざまな人との出会いがあり、その出会いの中で新たな発見や経験を積むことで、曲がりなりにも人として成長し続けることができたお陰だと感謝しております。お世話になった砥粒加工学会が、これからもモノづくりに携わる様々な人々の間に立ち、出会いの場を演出することで人々の成長に貢献する会として益々発展することを願っています。

少子高齢化の波が砥粒加工学会にも押し寄せ、学会でも若手会員の減少が問題になっています。この問題は単に会員数の減少に繋がるだけではなく、学会の存在価値にも大きく関わってきます。企業危機を招いた経営者のお話を伺うと、成功体験に頼りすぎて「社会の変化」に気づけなかったのが原因だと良く言われます。多分、成功した時代の経験・価値観を現在に應用しても役に立たないということだと思います。学会も未来の社会を築いていく若手の感性・価値観をどんどん吸収して、社会の変化に対応することで存在価値を維持できると思います。そのためにも、若手の会(図3)の活躍に期待しています。



図3 次世代ものづくり技術研究会開催の勉強会